

八、庚申塔こうしん

篠栗町の旧道や路地の分岐路、お寺や神社の境内などでよく「庚申尊」や「庚申尊天」と自然石に彫られた庚申塔を目にすることがあります。全国的に見て庚申塔が作られ始めたのは室町時代からで、江戸時代に入ると急速に各地で造塔されます。

しかし、明治時代には、劇的に庚申塔が作られなくなりません。これは、明治政府が発令した廃仏毀釈によるもので、庚申塔の造塔に壊滅的な影響を与えませんでした。

勢門小学校裏の道端や上町の須賀神社境内にもこのような石塔があります。これらの多くは、江戸時代に庚申祭の記念に建てたもので、現在町内には約三十三基あります。古いものは正徳五年（一七一五）の銘が彫られているものもあり、江戸時代中期から庚申講が行われていた証拠でもあります。

また、上町の遍照院には、この庚申尊天をかたどった「青面金剛像」がお祀りされています。この仏像は江戸時代に造られ、作者（田中幸之助・幸助）や作られた年（元文五年・一七四〇）がわかり、福岡県の民俗有形文化財（彫刻）にも指定されています。

自分が住んでいる周辺にも庚申塔があるかもしれません。ちよつと探してみてはいかがでしょうか。

そもそもこの「庚申待」とはいつたい何なのでしょうか？

人間の体内には「三尸の虫」と呼ばれる虫がおり、庚申の夜になると、寝ている人の体内から抜け出して、その人が行ってきた悪事を天帝様に知らせ、寿命が短くなってしまう。という信仰からきているようです。そのため「三尸の虫」が出てこれないように床の間に庚申曼荼羅（注）の掛け軸を掛け、庚申の夜には宵のころから一晩中寝ないでお経を読み、南無阿彌陀仏の念仏を唱えます。

庚申は一年に六回あります。最初に地獄道、次に餓鬼の苦痛道、三度目で畜生道、四度目で修羅道の苦を免れ、五度目で八苦の罪が減ります。そして最後には天上の五衰躰没の苦しみから救われるとされています。

庚申待では三年で十八回行うことを一座といい、この時には道のほとりに塚を築き、四方正面の卒塔婆をたて、供物をととのえ、供養をしなくてはならないとされています。



（注）庚申曼荼羅 中央に青面金剛、その上に日辰と月辰、下に鶏と三猿を配置する図柄。

参考文献

『庚申信仰』飯田道夫（人文書院一九九五）

『篠栗町誌』篠栗町役場（ぎょうせい）一九八二